愛知淑徳大学論集―人間情報学部篇　第４号　2014年３月，pp. 37-46

原著

凝りと澱の地から
――情報の蓄積・組織化をめぐって――

Human and society as organized biases of information

村　主　朋　英*

Tomohide MURANUSHI

要　　旨

本稿は，情報学と個人との関係再構築を図る過程の一部である。情報学にとって最も中核となる要因は思考する自我であると見なした上でそれを「ひと」を呼びかえ，ことば（おおまかに情報と比定できる）がひとを取り巻いていると見なす考えを基盤に置く。本稿では，まず前稿で導入した用語法を引き継いで「自我が世界の変化を許容しない状態」を「ひとは凝っている」と呼び，その用語により確保できる概念を軸に解の展開を進めた。その結果，ひとが凝ることによって生ずることばの特性（偏り・傾き）がひと（思考する自我）の存立基盤を用意し，そして，ひととことばの宇宙の動態は凝りの介在によって維持されるという解を得た。

キーワード：情報学の基礎　情報学的コスモロジー

１．あとさき～序論～

1.1　わからない

何も知らない，何もわからない。何をどうすればよいのだろう。

何も知らない，何もわからない。しかし，どうやら，どこからか，ひとつの声が聞こえてくる。

ここに至り着くまで，地を穿つような思考を重ねた。知識の山岳をあとにして，岩肌を削りながら降りくだる川であった。ならばこのあと，海へと転じ，大地を覆い越えようか。

何も知らない，何もわからない。しかし，一天から声が聞こえる。ときを告げる声が聞こえている。

1.2　みとおし　～目的～

本稿は，情報学と人間との関係再構築を目的とする一連の論稿[1][2][3][4] を継ぐものである。

直近の第四論稿においては，その帰結を受け，あらためて問題設定から見直す必要があると見て取り，次に取り組むべき課題を明示することなく終えることになった。しかし，それまでずっと，到達した場所の地形とそれまでの流勢によって水が次に進むところが自ずと示されるように，課題が稿のことばの連鎖に織り込まれていた。顕示させなくても，すべきことはかわらなかったことだろう。

残された課題がないわけではない。何より，目標はまだまだ遠く，それゆえ，進む方角にかわりはない。一連の論稿の方針を継承し，踏み出すべき一歩を探りながら進むことにしよう。

* 愛知淑徳大学人間情報学部　muransky @ asu.aasa.ac.jp

1.3　かた　～方法・意匠～

背景とする一連の論稿を引き継ぎ，概念の形成・整形およびそれによる解の展開を実質的な方法（戦術的方針）とする。

既存の考えを借りることを避けて慎重に（独力で）思考を進めること，そのために用語法を整えながら主要概念を整形（あるいは必要に応じて新たに形成）すること。ことばに囲まれ，ことばを武器にことばと格闘し，ややもすればことばに支配される自我をかろうじて統御しながら，ことばを紡ぐ。事態を捉え，得られた考えを慎重に，自らの手にほどよく収まる語彙によって解き，適切な形へと整えて語る。そうした工作が一連の論稿の軸線を担ってきた。

その際，およそ学術には似つかわしくない語を用いていることも，企ての一環である。初期[1] から使用してきた「ひと」「ことば」に加え，第四論稿[4] では「凝る」ならびに「こと」「かた」という用語を導入した。日本語を母語とする者の（しかもおそらく一部の者の）日常言語感覚に極度に依存し，日用語ならではの包括的性格（曖昧さ）を帯びるという危険を冒しながら，思索者（著者，読者双方）の実感覚を喚起し，既成概念により阻害されることなしに，適切な概念をふっくらと整形することを目指してきた。

これはひととことばとの対峙という第一論稿[1] の図式と符合する。第一論稿では，情報学と人文との邂逅という一件に示唆を得ながら，ひととことばというふたつの概念を情報学という営為の中核に位置づける解を導いた。その工程はある種の（素朴な）世界観を構成するとともに，論旨が反転し，論稿自体の方法論を保証するという巡りとなっている。

およそすべての学術が（ある種の／あらゆる意味で）ことばとの格闘とも言えるのかもしれないが，第一義的には「文学としての情報学」（文芸による情報学）の可能性という第一論稿の派生解に沿うものである。一連の論稿はそれぞれ，内発的な意に促されて展開し，またその意に沿ってテクストを構成しており，その意味合いにおいて，ある種の文芸である。便宜上「論稿」と称しているに過ぎず，論証と称することのできる工作を基本的に含まない。

ただ，可能な限り引用行為を避けてきたのは，既成概念による阻害および他のテクストの間に配置されることによる疎外を避けるための策であり，いずれ補償が必要である。説明・例証のための引用はともかく，参考にした・影響を及ぼしたような著作（もしあるならば）に対する言及は倫理上不可欠であるし，テクストとして構成され公表される以上は状況を背負うはずである。独断の弊に苛まれないようにするためにも，相似・相同関係の見出される他のテクストとの先後や層位を適切に位置づける作業が望まれる。

しかし，時代の子であると言うなら，参照先の著作は夥しい数にのぼることになる。ましてこの論稿の目指すところからすれば，古今東西の著作群（集合名詞としての文献），いや，未成のものを含むすべてのテクスト（ことば）に対する参照を提示したいところである。そうなると，論旨の完全な達成（少なくとも予定される輪郭の確保）ののちに行なうのが適当だ。

解を展開する余地は，いまだ多分に残されている。今回も，まず先へと歩を進めることにしよう。

２．問い　～問題設定～

2.1　みかえせば

第一論稿[1] は，情報学の情況を顧みて「この学術分野の組成をどのように捉えたらよいのか」という課題を同定し，「情報学の中核要因」を求めさぐるというアプローチのもとで検討を行なった。

結果として，情報学の中枢に位置すべき要因は「思考する自我」だと同定（推定）した。次に，思考する自我を「ひと」と呼び替え，その上で「ことば」がひとを取り巻くという解を付加した。これはおおむね「情報と人間のふたつを主たる考察対象とする」という謂いに比定できるが，ここで「ことば」という語を選好したのは，「情報とは何か」という問題の迷宮ないし沙漠に迷い込まないようにするためである。

情報 /information という語が論争のすこぶる多い多義語であり，論を展開する際に多大な（というより，おそらく終わりのない）準備作業の労を必要とする。しかも，（むしろ，それにもかかわらず）既成概念を誘発し，「わかった気になる」という負の効果が予想される。また，歴史的に比較的後発の語であり，用語法が日本語の日用語となって久しいとは言え（漢語の特性も手伝って）ややかしこまった語感を持つことも懸念材料である。要するに「ひとごと」という距離関係をもたらし，「認識主体」等の語を避けて「思考する自我」という表現を選択した着想，さらに「ひと」と呼び替えた戦術を損なう可能性がある。それらの問題は，思索者（自ら考える者）として思考の質を追求するという方針にもかかわるので，結果の素朴な印象と異なり，論の根幹にかかわる点であった。

次に，第二論稿[2] では，その「ひとを取り巻くことば」に焦点を当てて考えを進めた。ことばが「まわり」つまり直近の環境要因であるだけではなく，そのまま遠くまでずっと連なると推定し，その様態を検討した。人類の知識（知られていること / 語られたこと）の総体は「混沌」であると解すべきであること，その中に他者が組み込まれ，それぞれがそれぞれの意を語って寄与するとともに，それによって時間を生み出していると考えられること，その時空総体においてことばが尽くされているという解を措いた。

しかし，われわれ（ひと）は，実感覚としてそのようなところにいるわけではない。世界の中にいる。そこで，続く第三論稿は，ひとの経験する世界について検討した。それぞれの時点のそれぞれのひとがおのおの固有の世界を持ち，そうして諸世界が併存する状況について，矛盾という語の転用によって概念化した。それにより，第二論稿で認めた混沌（ひととことばによって成る総体）の局構造を推定することができた。つまり混沌は，ひとそれぞれの世界の総集合であり，だとするとそれは，世界を合わせた一層上の世界，つまり，いわば宇宙だということになる。

それとともに，探求の困難な「思考する自我」の特性について手がかりが得られた。それは明晰な記述ではなく，限界と制約の介在によって自我（ひと自身）を確認できるというある種逆説的な帰結である。それに加えて論考主体自身の問題であるから，そのような限界・制約は，「打ち克ちがたい」（正面から解決を図ることのできない）問題であると推察される。第四論稿では，そのことを踏まえ，事態に関する探求に留まらず「方策」（思考する自我の動態に対する処方）の模索を目的に加えて解の展開を進めた。

まず，その抗しがたい事象（状態ないし傾向）について，「（ひとは / 私は）凝っている」という語法を導入し，ひとが自分の世界から逃れられないのは「凝る」からだと見なす手続き的解を措いた。

ひとが「凝っている」時，世界は停滞・固定し，自然に訪れる変化すら妨げられる。その原因は多様であると考えられ，また，ひとはしばしば，不用意に凝るようである。凝っている状態が基準・基盤となって凝りを自覚し顧みることができない（少なくともその時に執着していることに関する省察ができない）事態も生じかねない。

もちろん，ひとは何らかの経緯ないし機構によって異状に気づき，それを解消しようとすることだろう。しかしその状態を持続することはできるだろうか。何か原因があれば，再び凝ることになるものと予想される。そうして，常に凝る危険にさらされている以上，一時的な症状と見るべきではない。「しばしば凝ってしまう」のではなく，凝りは周期のように（定期ではないにせよ，軌道を周回するように）繰り返しやってくる。凝ってはそれを解消するという往還ないし振幅がひとの常態であると言えそうである。だとすると，「人間はそれぞれの世界を持っている」という水準ではなく，檻に囚われるように世界に固着していると言える。

そのことを踏まえ，最後に，対処の方略に関する解を求めた。第三論稿の帰結（「世界の矛盾」はことばに密接にかかわる事象であるとの推定）を敷衍し，凝りはことばに伴う症候であると見なし，ことばと世界との関係に関する検討を通じてこの着想の操作を試みた。

作業にあたり，まず，元来不用意に用いていた「世界」という語に替え，「こと」「かた」というふたつの用語を導入した。その上で，「凝り」の主体ならびに作用因と過程に関する記述を通じてことばと凝りとの関係を検討し，展解の糸口を求めた。

2.2　いとぐち

まず，ひとが経験する世界の変化において，しばしば何らかの繰り返しが認められることに着目し，その繰り返し（パターン）を「こと」，ことに対する留意を「かた」と呼ぶという策を立てた。

かたとは，ことのパターンを見とめた時に現れるできごとであり，それ自体にもしばしば繰り返しが見られる。それを見とめた時に，「かたのかた」が現れることだろう。なお，そのようなことをかたそれ自身が受けとめるとは考えづらく，かたの痕跡（あと）のパターンが媒介すると推測される。ともあれ，「かたのかた」がことばに比定され，「かた」は概念または知覚に相当すると粗略に解釈できる。この用語法において，「凝っている」とは「かた」の変化が抑制された（かたが固定された）状態と定義される。

症例を鑑みるに，凝りの生ずる経緯解明は困難を伴うと思われるが，ことの変化に沿う限りは，しばし緊張で固まったとしても，ことの次第によってかたの変化が訪れるようである。したがって問題となるのは，ことの相とかたとが乖離するケースである。

第三論稿の最終段階では，新たなことばに目をとめることが世界の停滞を解く手がかりとなるという仮解を置いている。これを逆にとれば，停滞つまり凝っている状態は，特定のことばに対する留意と関係することになる。ことば（かたのかた）は，かたの繰り返しに依存し，その推移に沿って消長するはずだが，さらにその繰り返しに対する留意が生まれれば，「かたのかたのかた」（やがてはそれ以上の高次のかた）が生ずることだろう。そしてそれにつれ，特定のことばが沈着するものと推定される。

第四論稿では，そうして沈着したことばが鋳型としてかたに作用する（こととともに，ことばもかたを整形する要因となる）と推定した。特定のことばに対する留意がことによる作用を相対的に弱め，かたの固定を助長すると考えられる。加えて，ことばは「かたのかた」である（かた自体に対し反転・再帰的に見とめることにより生ずる）ため，こととの接触なしに展開できることになる。こうして，特定のことばに対する強い留意を示し，ことの推移と乖離・隔絶して変化が抑制される一方で，そのことばの持つ偏り・傾きに沿う形となった状態が凝りだという解を立てることができた。

凝りは思考の停滞ないし麻痺であり，思索者として回避したいところである。では，凝っていると気づいた段階で，逐次，対策をとることにしようか。しかし，なかなか気づかないことも多いようであるし，「念を込め気合いを入れて撥ね除ける」というような対象ではなく，自身の思考基盤の問題にほかならないのだから，容易ではない。

新たなことばは凝りを解くための契機となるようだが，その一方で，ことばである以上は，その後，それ自体も凝りを誘引する。ひとつのことばに対する留意を片端から次々に止めて凝りを解消したとしても，すぐに他の（あらゆる）ことばが控えている。ひとつのことばによる凝りを止めるために，他のことばに依存したのではお粗末この上ない。

凝りは人類活動のあらゆる場面において生じうるし，種々の文化的事象がそれを助長すると考えられる。そのことを踏まえるなら，文化によるあらゆる影響からの離脱，および文化に対する帰属意識や依存心の脱却を図る必要がある。しかし，文化の手の内で，それも近代文明の枠組みにおいて構成された自我にとって文化からの脱却は無理難題である。手始めに，妄信や個人的な思い込み・思い入れを捨て，次いですべての党派・教条に対する懐疑，種々の流行や趨勢その他，「精神に影響を与えかねない」外部因子を遮断するためにマスメディアとの接触を断ち，一方で，自身の感情の厳格なコントロールを図ってみようか。そうした，ある種穏健な良識は実生活で有効な助力となることだろうが，「凝る」という性向の根絶につながるとは考えられない。他方，フィジカルな意味で自然主義を採ったところで，そこに意図が介在する限り，それは文化の変種，それも，出自とする文化の亜種に過ぎぬものとなりそうである。

それでも，もしすべての作為・人為を捨てることができたとして，その工程を通じて得られる成果は，凝りを回避しようとした企図に合うだろうか。行き着く先の世界像は（それが世界像と呼びうるとして），知覚限界内の様相が散漫に（あるいは御しがたい激流のように）行き過ぎるだけのものと予想され，しかもそこでは，

獣性や物性に基づく凝りの無限連鎖が待ち構えていることだろう。

第四論稿では，対案として，凝りを自然と見なし，凝りへの没入と凝りの解消の往還運動をなすがまま・なされるがままに置こうという策を提示した。その上で，その自然の省察を重ねるのである。

そもそも「凝る」という用語は戦術的に導入したものである。用語法として致命的な弱点がある（体感覚に関する日用語というだけではなく，日本語話者の語感に依存する）ものの，その範囲においては，「ひとが凝る」「私は凝っている」と発話することによって，この逃れがたい，それ以前に捉えがたい自身の状態を概念化する効果を期待できる。こうして第四論稿では，そこで得られる概念を媒介として，世界の自然を観察していこうという着想へと行き着いた。

この策で期待できるのは凝りによる作用の抑制・緩和であり，克服を望むことまではできないことだろう。しかし，自らの凝りを概念化することによって，他の凝り（凝りを生ずる主体）をも概念化することができる。それは自身の枠・境界，いわば「世界の涯」を意識することへとつながるだろう。

その結果，よく知っている現実の中の人間やヒトではなく，この世界を越え，「世界の涯の先のかなた」にいる「ひと」（ひとびと）を遠望できるものと期待できる。その時にその目に映るのは，確固たる事物があると確信し自らが安住するこの現実を含み受けとめながら別の種々の異質な現実を併呑する世界，つまり世界を越えた世界の像であるため，宇宙像と称することもできる。

本稿では，以上を踏まえ，自身の凝りとともに他の凝りを見とめる観点から見える世界，自他の凝りの織り成す世界を探る工程を進める。

3．さかな　～検討材料～

3.1　The information science

世界・世界像ないし世界観の問題は，情報学においても見出される課題である。

本稿を含む一連の論稿は，情報学の文脈および主たる志向に沿うものではなく，情報という語の使用を戦略的に抑制しているが，情報学と名付けられる領域にかかわるテクストであることにはかわりない。

たとえば第二論稿[2] において B. C. Vickery による歴史叙述を引用した際には，主として論の構成に必要な概念模型を得るための参照にとどめているものの，彼が情報学草創期の著名研究者であり，情報学の総合的テキストブックを著した人物であることも引用の動機であった。すなわち，その歴史叙述が，典型的な情報学研究者の世界観を歴史世界へと投影したものであるということに着目し，情報学という領域の正統（orthodoxy）との連携を埋め込むことを企てた。そもそも第一論稿[1] が，情報学の領域構造に関する問題について，研究対象および視点・アプローチとの関係から解くものであった。このように，情報学における世界観の問題が一連の論稿の底流にある。

ここで言う情報学は，英米で言う information science（いわゆる狭義の情報学）であって，日本における情報学・情報科学の含みと趣旨を異にする。しかし，まさにその齟齬こそが，世界観に着目するアプローチを採用する動機のひとつとなっている。

さて，この情報学 /information science は国際・学際的な揺らぎを除外してもなお基盤の不安定な領域であるものの，そこに内在する見識には，他では得られない特徴があると見受けられる。他であまり扱われない対象に専従しているからではない。情報，あるいは知識に関する独特の観点を持つ点である。

その特徴を露見させる契機となったのが，Karl Popper の objective knowledge という語にまつわる論争であった[5]。

3.2　Objective knowledge

Karl Popper の導入した「objective knowledge」という用語は，客観的（科学的）アプローチに基づく理解

ないし知見という種の含意ではない。認識主体およびその機構に対し，「知られた内容」「知られている事柄」を分離・概念化するために用いられたものである[5]。

Popper 自身は主として科学哲学に関する考えを展開するための道具として導入したものだったが，情報学においてはこの語を援用して情報概念・知識概念を再構築しようとする動きが生じ，Popper 哲学自体に対する批判を含む論争へとつながった。

その争点および論争の帰趨はさておき，このことが論争となったこと自体が示唆的である。「認識主体およびその機構」であれば，長く哲学の主要な問題領域となってきた。それが主に認知科学によって科学的探求の対象となった。しかし情報学の中に objective knowledge 概念への留意が認められることは，情報専門職（図書館職や情報検索業務）にはそれらに全面的に委任できない要因が含まれていることを少なくとも一部の成員が認識もしくは確信している（していた）ことを意味する。

つまり，論争当時に成立期を迎えていた認知科学や，情報学にも多大な影響を与えた現象学的社会学の志向に抗うように，「情報（知識）そのもの」を見据えようとする志向（情報・知識を対象化する視座）が情報学に内在することが論争の過程で露見したと言える。

この視点は，日本で独自に発達をとげた情報科学（少なくとも初期は情報現象よりも情報処理機構に留意を向ける領域概念であった）や，コミュニケーション研究（社会学の趨勢を背景基盤として，主たる要因を人間行動に求めるという性格が見られた）等の隣接領域に情報学を還元・吸収せず，それらと異なる独自の見識を確保すると同時に，文字通りに情報を対象に置く領域を維持するための支持棒だったのではないか。

このように，この概念は情報学に内在する考えを洗い出すための媒介として有用である。そして，1980 年代に提唱された情報史（history of information）という語[6]の解釈の過程でも，この objective knowledge 概念の援用が一定範囲で有効であった。

3.3　The history of information

情報史（the history of information）という語は，Norman D. Stevens の造語である[6]。情報学という学問領域が当初，主として現代と将来にかかわる性格を有したことを踏まえ，情報学の存立基盤確保のためにも有効な歴史概念を構築しようという企図のもとで提案された。

実体も実態もない新たな歴史研究活動を創出しようという企てだったが，そのこと以上に，情報（information）という語を冠することから，情報学全体と同様に，範囲の広がり（対象の多様性）という問題に接触する提案であり，それゆえ必然的に，情報学が古くから課題としてきた「学際化」というミッションに直面した。

そこで，その解決を図るため，情報史に関係のある対象（事物）およびそれに対するアプローチを検出するとともに，相互の関連づけを図ることを試みた[6][7]。

その過程で，Popper の objective knowledge 概念を援用することにより，「情報にかかわる何か」ではなく情報自体（あるいはそれに類する事象）を探求するアプローチを概念化した。その上で，そのアプローチを軸に情報史に対する種々のアプローチを組織化することを企て，「情報の自然誌」という着想に至った。というのは，人間や機器・制度に焦点を当てるなら，わざわざ「情報史」という名称を付す必然性はなく，既存の歴史概念でさほど苦もなく賄えるはずだからであり，情報史と称するからには「情報それ自体」（何らかの意味で）の探求を含む必要があると判断したためである[6]。

この試論が実を結ぶことはなく，その後の情報史研究は（一枚看板ではなく）種々の個別歴史概念のもとで展開を見たが，それら全体をあらためて（仮想の統合領域として）眺めてみると，個別歴史概念が背景とする個別学術研究領域（情報・コミュニケーションまたはメディアの概念にそれぞれ何らかの強い関心を持つ諸領域）の視点が歴史の時空にそれぞれ投影されていると見ることができる。

つまり，情報史という歴史概念は，情報（等）の概念に関する異種の観点を射影する統合実験場という性格

を持つ。しかも，史実ないし史料という具象物を巻き込むから，異種の観点の比較・対照・関係づけにおいて，豊富な手がかりを提供する。つまり，情報史の探求が情報学という学際領域の組織化の一助となる可能性を有すると言える[7]。

3.4　世界観の饗宴

情報学であれ情報史であれ，異種の観点・アプローチが投入される研究領域であると見なすことができる。おのおのの観点・アプローチの多くは，既存の学術分野の見識や成果を背景に持ち，それゆえ，おのおの独自の世界観・世界像を有する。その結果，情報学（情報史）は，「世界観の饗宴」（あるいは歴史観の干渉縞）とでも呼ぶべき情況を呈している。

学際領域の動向においては，「敬して遠ざける」関係がしばしば見られる。しかし，それは教育・研究機関における人間関係としては効果的であるとしても，その状態の継続は学術研究の維持・発展にとって効果的であるかどうか，議論の余地が多分にある。

かといって，異種の世界観の調整（さらには統合）は容易ではない。本章で言及した試みにおいては，情報学（狭義の / 英米における information science）に固有の観点を見出しているが，そのような観点が情報学の標準的世界観と認められているわけではない。

この難問は，本稿第２章における問題設定を展開するための手がかりを提供する。

４．解き

4.1 「ことばとひと」revisited

以上，再び情報学を参照することによって，世界観の饗宴という副次的（戦術的）問題設定を引き出すことができた。その問いを解くにあたり，翻って，一連の論稿[1][2][3][4] の論旨（得られた解）を世界像・世界観という観点から（第２章と別の形で）あらためて解いてみよう。

第一論稿では，情報学の形を探るうち，中核要因は「思考する自我」だと同定（推定）した。その上で，思考する自我を「ひと」と呼び替え，それを「ことば」が取り巻くという解を付加した。つまり出発点は，学術上の要請ということになる。その際，「他のひと」は，ことばの煙霧のかなたの推定上の要因である。

第二論稿ではその解の延長で，ひとを取り巻くことばの総体について検討した。ことばの総体は混沌であること，「ひと」はその中にあってことばの生み出される特異点であり，ひとがことばを語ることによって混沌における時の刻みが発生すること，語られたことばとひととが混沌における空間を構成すること等の解を設けた。

ここでおおむね世界像（ないし宇宙像）を確保した。第三論稿では，ひとの経験する世界（日常，ひとの世）という難物（不可解）を解く工程へと進み，「わかるまではわからない」という着想を端緒に，ひとが世界に閉じ込められ，それゆえに世界の涯の向こうの豊かなことばの宇宙が見えないと解した。

通常，世界はやがて自然とかわるようだが，時に停滞し，かわろうとしないことがある。続く第四論稿では「凝り」という語を用いてそのことを概念化し，その原因をことばに対する固着に求めた。ことばに対する固着は，思想・教義や種々の社会的規範，さらには科学等，種々の文化的事象の姿をとって現れる。最後に，それらに支配・制約されないようにする策を求め，そうした文化現象（人為）をも自然現象と見なす考えを保つことを提案して終えた。

ひとが凝っている時，ことばの生み出すかたによって世界が制約される。良心の名の下に凝りを解いても，やがて凝る。必ず凝る。しかも，不用意に凝ることがある。とすると，眼前の世界が凝りに制約される（ことばの生み出すかたで埋められている）という可能性が常にあるということになる。そうではないことの方が多いかもしれないが，いつでもそうであるという可能性がある。厳格に考えるなら，確かなのは，ひとが凝ると

いうこと，そしてことばが介在・作用するということだけである。

「凝る」という語を用いて「ひとが凝る」(凝りうる）ことを概念化することにより，あらゆる文化的事象（思想・教義，社会的規範，科学等）がことばの組織にすぎないものと見えているはずである。それによってそれまで見えていた世界が不確実なものとなって色を失い，かわりに，種々のことばの散在する荒寥とした風景が広がることになる。

こうして，第四論稿は，ひと（思考する自我）とことばから成る世界観を再確認しながら更新する工程となった。

実際には，このヴィジョンは本稿（またはこの一連の論稿）のことばに固着して凝っている時に現れる世界像にすぎない。このテクストから離れさえすれば，世界（日常）はやがてまもなく再び姿を現し，確固たる実在として視野を埋め，実世界（日常）の消失というナンセンスな事態は起こっていないことを確認するだろう。このように，昼夜醒睡のリズムのように明滅する世界の，波のような交互運動の狭間，「表の」世界（日常）の停止している時間を縫いながら，さらに展解を進めることにする。

さて，再び本稿の文脈に留意を戻すことにしよう。それによって，今，世界が失われ，ことばとひとの宇宙が見えているだろうか。そんなことはない。しばらく待っても，“ことばの総体から成る無限の混沌”[2] が見えることはないようだ。どうしたものか。

4.2　かたより・かたむき

当初，ことばがまわりに散乱しているように思えたが，やがて，一定の（特定の）ことばが何度も現れることがすぐわかってくる。耳鳴りのように連続するものではなく，全く同じことばが繰り返されているわけではないが，おおむね似たようなことを語ったことばがしばしば聞こえてくる。どうやらまわりを取り巻くことばには，偏りがあるようだ。

偏りがあるならば思考の選択肢が少ないわけで，凝りも起こりやすくなるだろう。だが逆に，凝りがまたことばの偏りを生ずることもあるようだ。あることばに留意を向ける時，そのことばに対する思考型が生じ，ことばの操作を引き起こすことがある。ことばの操作，たとえば連鎖・結合は選択・限定を伴うし，そもそもその工程自体がことばの繰り返しを自ずと伴い，偏りが助長される。

ひとは時に強く凝り，また時には小刻みに凝りと凝りの解消とを繰り返し，そのうちに，凝りの澱が沈着するようにことばの組織が生ずるようである。そうしてできた組織（ことばの偏り）は常にひとととともにある。そうなると，時としてことばに捕まり囚われるというより，そもそも常に特定のことばから成るかたまりを抱えている，あるいはかたまりの上に乗っているとでも言えそうである。

何らかの偏りのあるかたまりとともにあれば，新たなことばに対し，しばしば違和感を覚えることだろう。まとまったことばであれば，異なる偏りを持つと見て取ることもあるだろう。一方，小さなことばであれば，そこに偏りを見とめることはあまりないのだろうが，それでも何か食い違いを覚えるとすれば，それを「傾き」と呼ぶことにしようか。

こうして，自我の成分の半分は偏りないし傾きのあることばのかたまりである，絶えず組みかわる塊なのだ，と言えそうである。(残りの半分は，「かた」ということになる）

今この時点では世界が目に入っていないから，他のひとのことはますますわからなくなっているが，あることばが誰か他のひとのことばであり，そしてそこに異なる傾きを覚える時，他のひとは異なる偏りのことば塊を持つと推定することができる。あるいは実質的に，他のひとは，ことば塊そのものであるとすら言えるかもしれない。そう割り切れば，むしろその方がわかることが多くなるようにも思われる。

一方，他者とは人間やヒトには限られず，何らかのことばの組織（体系）であれば，偏り・傾きを帯びることによって「他者」と扱われる資格を持つこともありそうである。どのみち「他の人間」とて，少なくとも認識主体としての実体が見えるわけではなく，集団であれ制度であれ，はたまた仮想の存在であれ，それと根本

的にかわるものでもない。

その結果，たとえば「思想」「宗教」といった文化的事象は偏りや傾きによって定義することができ，それゆえに固着を誘引して凝りを引き起こすとともに，まさにそれゆえに他の傾きを持つ者にとって，時に誤った知識・邪な教義と感じられたりするのではなかろうか。

そして，「科学」がこの例に数えられるなら，諸分野間の観点の差異や折り合いの難しさといったことについても，一定の解が得られる。

いずれにせよ，こうしたことが凝りによって引き起こされていることを考えるなら，ひょっとすると，凝りはそう悪いものでもないのかもしれない。

4.3　凝りの力

ひとびと（人間とは限らない）は，それぞれ，偏ったことばの塊（組織）を帯同する。そこに組み込まれた（連合する）ことばは，その偏りゆえに一定の傾きを持ち，他者との齟齬をもたらす。

しかし凝りのもたらす作用は，あながち，蒙昧・頑迷や狂信ばかりではないようである。凝りの運動によって形成されることばの塊は，おのおの固有の偏り・傾きゆえに，固有の視点から固有の部分／側面に関する知見を提供し，全体として，それぞれ，固有の価値を持った世界像を見せる。

凝りはまた，ことばをとどめる効果を持つ。選択し，保存し，関係（価値）を付与する。誰かがよいことばを語り，また誰かが銘記していつか他の誰かに伝えることがある。それがなければことばが拡散・放散し，「熱力学的死」のような状態へと至るのだろう。そして，ことばは，何らかの偏り・傾きに組み込まれることにより，「知識」「情報」と呼ぶべき属性を帯びる（少なくともそう感じさせる）のかもしれない。ひとが凝ることによってこそ，ひとことばの宇宙の脈動が維持されるものと思われる。

ただ，当然ながら，偏れば全体を網羅することはできない。ならば，おのおのの「ことばの塊」を維持・助長しながら，別途それらすべてを総合すればよい。結合や融合は（少なくとも容易には）望まれないだろうが，すべてを遠望し，ひとつの視野に収めることができれば用が足りるだろう。

そのためには，おのおののことばの塊が体現する世界観を超越する世界観，つまり宇宙観を構築すればよい。そうした超越的な世界観（宇宙観）もひとつの世界観であるから，関連することばの組織が示す偏り・傾きによって記述できるはずである。そのようなことばの組織とそれに起因する《凝り》がことばの宇宙全体を見渡すための重要な基地となるだろう。

さて，3章で言及した文献は，その点で情報学が貢献しうるという着想を含んでいる。ひとつの学術領域である以上は情報学も固有の対象・観点・方法および慣習・因襲によって強い偏りを持つわけだが，それらの特性がむしろ他の諸領域を包越する機構につながるものと期待した。たとえば，図書館学（librarianship としての）が起源のひとつであり，それゆえ図書館員（他者の情報ニーズと向き合う一方，資料の蓄積・組織化に留意する職能）の視点が情報学にも遺伝しているはずだという観測がその根拠のひとつである。実際の情報学における組織と問題を共有できるかわからないが，そこに内在するであろう傾きから，いくつかの示唆が得られる。それを足がかりに，また新たな解を重ねていけばよさそうだ。

文献

［1］情報学の中核にあるもの：根源からの再出発を企図して．愛知淑徳大学論集　文学部・文学研究科篇．No. 35，2010，pp. 123-134.

［2］情報の時空：われわれをとりまくもの．愛知淑徳大学論集　人間情報学部篇．No. 1，2011，pp. 31-44.

［3］情報と矛盾：世界の構成．愛知淑徳大学論集　人間情報学部篇．No. 2，2012，pp. 63-71.

［4］こと・かた・ことば：情報の発生と伝達によせて．愛知淑徳大学論集　人間情報学部篇．No. 3，2013，pp. 43-48.

［5］Karl Popper の“客観的知識”概念とその情報学に対する意義．Library and Information Science. No. 24, 1986, pp. 1-10.

［６］情報史のための枠組みと方法論．Library and Information Science. No. 32, 1994, pp. 43-64.
［７］情報史研究の戦略：情報史における情報学史の役割を中心に．Journal of Library and Information Science. Vol. 9, 1995, pp. 57-76.

※いずれも自著引用，煩雑であるため，著者表記を割愛した。